

修士論文（要旨）

2012年2月

高齢者の社会活動性を規定する要因に関する考察

指導 森 和代 教授

心理学研究科

健康心理学専攻

学籍番号：210J4056

杉浦 忠

目次

第1章 序論

第2章 研究の背景

第1節 高齢期における社会活動の意義

第2節 社会活動性にかかわる要因

第3章 本研究の目的と意義

第4章 研究1 高齢者の社会活動性に関わる要因の検討

第1節 研究目的

第2節 研究方法

第3節 結果

第4節 考察

第5章 研究2 心身健康度の低い高齢者が活発に社会活動するに至るプロセスの検討

第1節 研究目的

第2節 研究方法

第3節 分析結果

第4節 まとめ

第5節 考察

第7章 総合考察

引用文献

資料

1. 研究の背景と目的

社会活動への参加は、人間が生きる上での基本的なニーズの一つである。高齢者にとって社会活動は、ADL や生命予後にかかわること（柴田、芳賀 1992）、認知症の発症リスクを低下させること（Wang H. 2002）、主観的幸福感や健康度を高めること（古谷野 1995）、主要な生きがいの一つになること（エイジング総合研究センター 1998）、などが先行研究によって明らかになっている。

一方、高齢者の社会活動への参加にかかわる要因としては、年齢、活動能力や ADL、活用できる技術・知識・資格、ソーシャルサポートやネットワークなどが明らかになっている（松岡 1992）。但し、それらの研究の多くは 10 年以上前に行われたものである。高齢者を取り巻く社会環境は近年著しい変化を遂げており、それにともない高齢者の社会活動も変化しているはずである。本研究では、そのような観点に立って、新たな時代を生きる高齢者にとって、社会活動がいかなる意味をもつかについて検討した。

2. 研究 1：高齢者の社会活動性に関わる要因の検討

研究 1 では、質問紙による調査により、「配偶者の死別」、「定年退職」、「身体健康度」、「精神健康度」「孤独感」「暮しぶり」「若い頃の活発度」「友人・知人のサポート」などの要因が、社会活動性（個人活動、社会参加、学習活動）とどのように関係するかについて検討した。調査対象は、東京周辺の Z 市在住の高齢者 521 名である。重回帰分析の結果から、高齢者の社会活動性には、「身体健康度」、「孤独感」、「若い頃の活発度」が影響を及ぼす主要な要因であり、さらに「身体健康度」には「暮しぶり」が、「孤独感」には「友人・知人のサポート」が影響を及ぼす要因であることが明らかになった。一方、精神健康度は社会活動性に影響しないことが明らかになった。

精神健康度が社会活動性に影響しないこと、さらには身体健康度と社会活動性の因果関係も強くはない（標準化係数 $\beta = .138 \sim .293$ ）ことは、裏返して考えれば、「身体健康度、精神健康度が低い人でも、社会活動性が高い人が多くいる」ことを示していると言えよう。そこで、心身健康度の低い高齢者でも活発に活動するに至るプロセスを明らかにする目的で、研究 2 を行うこととした。

3. 研究 2：心身健康度の低い高齢者が活発に社会活動するに至るプロセスの検討

研究 2 では、修正版グランデッド・セオリー・アプローチ（木下, 2007）にもとづいた質的研究法を選択した。調査対象者は、研究 1 の調査対象者の中で、身体的健康度および精神的健康度のいずれか、あるいは両方が全体の平均以下であるにもかかわらず、社会活動得点が平均以上である 9 名に依頼した。分析から得られた活動開始～継続のプロセスをまとめてみると、【初動期】には、「このまま不活発にしていけない」との思いを抱き、経験や知恵を動員して「ともかくも動き出す」、【継続期】には、多くの人々が「人の役に立ちたい」との強い信念が支えになった活動動機を強固にし、【充実期】には、さまざまな手段でうつ状態からも脱却し、社会活動による「生きがいの発見」を覚えるに至っている。

3. まとめ

本研究の成果が、今後、「健康で活発に社会活動する高齢者」をめざした社会施策を考える

上で役立つことを願っている。

引用文献:

安藤孝敏、長田久雄、児玉好信 (2000) 「孤独感尺度の作成と中高年における孤独感関連要因」
『横浜国立大学教育人間科学部紀要』第3号 19-27

エイジング総合研究センター (1998) 『高齢社会基礎資料年鑑'98・'99』中央法規出版

福原俊一、鈴嶋よしみ(2004) 「SF-8日本語版マニュアル」 NPO健康医療評価研究機構・京都
橋本修二(1997) 「高齢者における社会活動状況の指標の開発」『日本公衛誌』第44号 760-767

木下康仁(2007) 『ライブ講義M-GTA 実践的質的研究法』弘文堂

厚生労働省(2010a) 「平成22年簡易生命表」

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life10/index.html>

古谷野亘、岡村清子、安藤孝敏、長谷川万希子、浅川達人、横山博子、松田智子 (1995) 「都
市中高年の主観的幸福感と社会関係に関連する要因」『老年社会科学』第16号 115-124

前田信彦 (2003) 「高齢期における多様な働き方とアンペイド・ワークへの評価～男性定年退
職者の分析～」『国立女性教育会館研究紀要』第7号 21-31

松岡英子 (1992) 「高齢者の社会参加とその関連要因」『老年社会科学』第14号 15-23

松坂由香里、西田厚子、堀井とよみ、平英美 (2005) 「退職移行期にある中高年のアクティ
ブ・エイジングと健康との関係」『第20回健康医科学研究助成論文集平成15年度』

121-130

NHKスペシャル取材班, 佐々木とく子 (2007) 『ひとり誰にも看取られず：激増する孤独死
とその防止策』東京：阪急コミュニケーションズ

中村菜々子、上里一郎 (2008) 「中高年の日常いらだち事と精神的健康の関係」『ストレス科
学』第23号 226-238

野村知子 (2011) 『厚生労働科学研究費補助金政策科学総合研究事業：「食」を通して支え合う
コミュニティづくりに関する研究 平成22年度総括・分担研究報告書』10-27

岡本秀明(2009) 「高齢者の活動に着目した日頃の活動満足度尺度の作成」『社会福祉学』第50
巻第2号 45-55

大川弥生(2008) 「廃用症候群（生活不活発病）の予防・改善」『臨床スポーツ医学』第25号
997-1006

大野良之(1998) 『いきいき社会活動チェック表の手引き』高齢者の社会評価に関する研究
班

尾島俊之(1998) 「いきいき社会活動チェック表の開発」『公衆衛生』第62号 894-899

清家篤 (2006) 『エイジフリー社会』社会経済生産性本部生産性労働情報センター

柴田博、芳賀博 (1992) 「中年からの老化予防総合的長期追跡研究報告書」東京都老人総合研
究所 11-26

Wang H., Karp A., Winblad B., Fratiglioni L. (2002) 「Late-Life Engagement in Social and
Leisure Activities Is Associated with a Decreased Risk of Dementia: A Longitudinal
Study from the Kungsholmen Project」 Am J Epidemiol Vol.155, No.12